やさしさ・責任

僕はつらい。生きていてつらい。かわいくて優しい彼女でもいれば少しは楽しいだろうに、一人で起きて、一人で顔を洗って、一人で朝飯を食って、一人で電車に揺られて…独りぼっちでただ毎日を生き、それを数万回繰り返した挙句いつの間にか死んでいる。ひどいもんですわ。

しかし、よく考えたらわたしたちって本当に一人なんですかね？ちょっと周りを見渡してみましょう。僕は今こうやって演台に立って弁論をしてますが、この場を提供してくれるのは我が早稲田大学雄弁会と、慶應義塾大学弁論部です。また、我々がサークル活動をしたり勉強したりできるのは、学習を援助してくれる大学のおかげ、また我々が日常生活を送れているのは行政サービスを施してくれる区や街、国民の生命を保障してくれる日本国のおかげ…そう、私たちって案外一人じゃなかったりして、いろんな人のお世話になってるんですね。

だからこそ僕たちはここで社会や政治について語って、お世話になっている人たちがそうした問題によって社会の中で独りぼっちになってしまうことを避けようとしているんです。トラックドライバー、生活保護、高齢者事故…直接会ったことはなくても、もしかしたら僕たちをお世話してくれたかもしれない人たちが、自分たちだけではどうにもできない社会問題によって一人で悩み続けている…そうなってしまうのを防ぐために僕たちは今ここで弁論しているんじゃないですかね？

僕たちは様々な集団に所属すると同時に、その援助によって生きている。また、所属するもののために何かしら関わって、その見返りに援助を受けているともいえる。大学であれば学費、サークルであれば会費、自治体や国家であれば税金…私たちは、一人では生きていけないがゆえに、様々なグループを作り、その一員としてその共同体に参画してその見返りに生活を保障してもらっています。僕たちがこうやって弁論サークルに入って弁論させてもらっているのも、会費を払ってるからですよね。これは give and take の契約関係にあるといえます。ですがもし僕たちが会費を払っているのにも関わらず活動に参加させてもらえなかったらどう思いますか？おかしいですよね？世の中の社会問題って、この give and take の関係が崩れたときに起こるものなんじゃないでしょうか。

しかし、わざわざそんなことを意識しなくても、共同体というものはわれわれのもっと身近に存在しています。

考えてみてください。あなたが友達と待ち合わせをしていたとして、その友達は寝坊して１時間待ち合わせに遅れてきた。あなたは彼と絶交しますか？それぐらいの事じゃしませんよね。そこに共同体というものの本質があるんです。

共同体の中で僕たちは、援助という形でそのやさしさを受け取ると同時に、コミットメントという形で責任を果たしています。しかし、その責任って実は誰かへのやさしさになってるんですね。例え誰かが責任を果たせないとしても、すぐさまその人を見捨てるようなこと

はしない。やさしさという感情を以てして援助を続ける。地域社会や国家だって、税金を払わない人に対しても生活保護や行政サービスを提供しています。One for all, all for one そのものです。この One for all, all for one の精神こそが、共同体を形作る基本的な精神なんですね。共同体は、give and take の単純な契約関係ではなく、精神的な結びつきを含んでいるものなんです。これは、個々人の信頼関係に限った話ではありません。地域社会と住民、国民と政府、もしくは国民の間にもある種の信頼関係があるといえます。電車の中でお年寄りに席を譲ったり、お店のレジに並んだりするのも、マナーという名の共同体精神といえます。そもそも、一人で自分の命を守っていくのがあまりにも大変だから、僕たちは国家ってものを作ってそこに自分の命を預けてるんじゃないですか。

しかし、ここで一つの疑問が生じます。果たして現代の日本という国に、そんなきれいな関係は存在するのかと。残念ながら、そうとも言えない例もあります。Give and take の関係が崩れてしまい、どちらかが過多になってしまっている状態。命を守るって観点で言えば沖縄に米軍基地が集中してる問題なんかまさにそうですよね。日本人全体の命を守るために、僕たちは沖縄の土地を take してますが、僕らは彼らにその分 give できているんでしょうか？何か give しているとして、果たしてそれは釣り合っているんでしょうか？そこにはどうしても否定できない、一方的な負担があると言わざるを得ません。まあ沖縄に関してはアメリカの都合や地理的要因もあるでしょう。ある意味あそこに基地が集中するのは非常に合理的な事ではあります。ですが、それを是認してしまったら、いったい沖縄とそれ以外の僕らの間に何が残るんでしょうか？Give and take の関係が崩壊し、All for One の精神が失われてしまったら、いったいそこに共同体としての結びつきが残る余地はあるのか？

もう一つ例を挙げましょう。２年前のシリアの日本人人質事件。私たちは葛藤しつつも、結局二人の人質を見捨てる道を選びました。もしあそこで身代金を払っていたら再び日本人が誘拐されることになってしまっていたかもしれない。IS の要求を呑むのは国際社会に対する責任の放棄だ。確かにそうでしょう。あの事件には僕たちとあの二人だけがいたのではありません。他国に対する配慮、未来の日本人に対する配慮もまた理にかなったものだったでしょう。ただ、その合理性は彼らを見捨てることを肯定する理由にはなりません。僕たちが彼らを見捨てることを容認してしまったとき、僕たちはまた All for One の精神を捨ててしまうことになるんですよ。

こうして Give and Take の不釣り合いをほったらかし、All for One の精神をどんどん捨てていった先に何があるのか？ 死です。大量の同胞の死をなんとも思わなくなるんです。７０年前の戦争で、無謀な作戦によって多くの兵士たちが犠牲になりました。「日本のため、祖国のため」そう言われて何十万人もの将兵が灼熱の密林に、凍える荒野に、千尋の海原に倒れていきました。彼らを死に追いやった作戦を支えていたものは何か。当時合理的と信じられていた「何か」でした。後世の我々から見たらその「何か」は明らかに非合理です。精神論、根性論、それが何かであるかはっきりとした定義はありませんが様々な名前で呼ばれています。勿論当時の軍人だってバカじゃありません。自分たちが合理的と信じていた「何

か」に基づいて作戦を立案し、それを最良の計画として実行に移した。その結果があの参事です。国家のトップレベルのエリートが信じる合理性だって間違っていたんです。なんで我々は合理性を以てして共同体を自ら破壊することを肯定できるというんでしょうか。

立ち返って考えてみてください。なんで私たちはこのような状況に陥っているのか。それはひとえに、共同体に求められる責任の形が変化したからに他なりません。共同体に求められる責任の形とは何か？